宮城学院女子大学

プロジェクト型自主活動

住友商事　東日本再生ユースチャレンジ・プログラム2012

宮城学院女子大生による
子どもの「日常」再生ネットワーク
活動報告2012

宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター（MG-LAC）

— *Contents* —

■ 宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク・・・1

■ 2012年度の活動

1. 石巻市立大原小学校　学習支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2. 小学生のためのサマーカレッジ2012・・・・・・・・・・・・・・・・5

3. 仙台市立南光台小学校　学習支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

4. 東松島小・中学校　夏休み学習支援・・・・・・・・・・・・・・・・・8

5. りんごプロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

6. その他の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

■ 宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク

宮城学院女子大学の災害復興ボランティア

発災から 2 年の時が過ぎ、被災地への社会的関心は薄らいでおり、世間における被災者支援やボランティア活動の機運も、かつての熱気を失いつつあります。しかし、被災者にとって長く厳しい日々が続く現実が、変わるわけではありません。逆説的かもしれないですが、「災害復興」や「被災者支援」という枠組みに囚われすぎないことこそが、災害復興ボランティアを長期的に続けるためには必要なのではないかと、私たちは考えています。緊急対応期における非日常的な活動としての災害復興ボランティアを、復興期における日常的な活動へとだんだん移行しつつ、無理なく継続していくことが大切なのではないでしょうか。もちろん、その理念を実行するのは、容易ではありません。緊急対応期の後、長く緩やかに続く地域復興の過程を通して、地道な支援活動を先細りさせることなく継続するにはどうすればよいのか、宮城学院全体で考え、精一杯取り組んでいきます。

子ども支援プロジェクト

東日本大震災から 2 年を迎えた現在、かつてのように瓦礫片付けなどへの人手が必要とされていた状況から、被災者の皆さんの生活再建をサポートするための多様で複雑なニーズに応えるフェーズへと、ボランティアの形も移行しています。宮城学院女子大学では、学生たちが一時の盛り上がりに終わらずに長期継続できる取り組みとして、総合的な子ども支援活動を展開しています。

震災直後には我慢強い「よい子」でいた宮城の子どもたちが、時間の経過に伴って、内在化させていた深刻なストレスを表出し始めています。不安や悲しみ、心的外傷を抱えながらも、多くの子どもたちはそれを言語化できず、SOS を出すのは氷山の一角にすぎません。また津波被災地では、発災から一年以上が経った今でも、教員たちは多忙を極め、保護者も生活の再建に追われて、時間をかけた丁寧な子どものケアができているとは言い難い状況にあります。

本活動は、そのような事態の打開を目指す、宮城学院女子大学の学生による継続的な子ども支援の試みです。単発的な学習補助や遊び機会の提供にとどまらず、「学び」「遊び」「食」を総合したアプローチにより、被災児童が「3.11」以降に失った「日常」を再生する一助となるべく、尽力したいと考えています。

発災直後は個別に展開していた、学校常駐型の学習補助、炊き出し活動、音楽による慰問、遊び支援などを統合して、各部門が連携した総合的な子どもケアに昇華します。2012 年度は、住友商事による「東日本再生ユースチャレンジ・プログラム 2012」活動・研究助成をいただき、本学卒業生のネットワークがある県内沿岸部の被災校に、活動を広げてきました。

MG 子ども支援の理念

本活動がめざすところは、以下の 3 点に集約されます。

⑴総合性：異常事態への対応よりむしろ、発達の保障を前提とした心地よい「日常」の再生という視点から、子どもの生活に多面的に関与する。具体的には、学び（学習支援や英語活動）、遊び（音楽や表現など）、食（上質な食事の提供）のジャンルで連携してボランティアを展開し、子どもたちとの個別対話を通じて、各自異なる発達課題に応じた生活リズムを作り上げる手助けをする。

⑵継続性：不安や心的外傷を抱える子どもたちに必要な、上下関係が確立した相手である教員以外の、共感的な「安心できる他者」を確保する。単発的な慰問活動ではなく、メンバーがシフトを組んで学校に常駐する。小さなつぶやきにも耳を傾け、モヤモヤした気持ちを言語化するプロセス

に寄り添う「年上の友だち（仲間）」として、子どもの生活に溶け込む。

⑶重層性：激務と責任の重さに疲弊する教員をも併せてサポートする（特に新任や経験の浅い教員の負担を一部分け持つ）。とりわけ、学校も家庭も十分なケアがしづらい、身体的ハンディ・発達上の問題・近親者の喪失などにより心理的な脆弱性を抱えた子どもたちへの、授業内外の時間をできるだけ長く共有する個別対応を、多忙な教員・保護者に代わって行う。

本活動は、「被災者支援」という枠組みに囚われず、被災時から平時へとまたがる長期的な活動ネットワークを確立することで、子どもたちの「日常」を再生し、生活の質を高めていきます。その取り組みを通じて、専門性が高くない学生主体のプロジェクトとして実効性を持ちうる、地元学生だからこそ可能な、（単発の慰問ではない）総合的・継続的・重層的なサポートのノウハウを蓄積し、ゆくゆくは災害後の子ども支援一般に応用可能なプログラムへと整理して、被災各地に提案したいと考えています。

■ 2012年度の活動　1. 石巻市立大原小学校　学習支援活動

石巻市立大原小学校は牡鹿半島の海沿いにある全校児童 27 名の小学校で、震災後、被災し閉校した谷川小学校と統合しました。半数以上の子どもたちが仮設住宅に暮らし、バスで通学しています。

同じ宮城県にある大学として、津波被害が大きく支援の届きにくい地域こそ支援していくことが必要と考え、継続的に活動してきました。大原小学校のある石巻市大原の地域は、ＪＲの不通区間があったりバスの運行本数が限られているなど、日帰りで通うことが難しく、学生たちは石巻市内に宿泊しながら通っています。2012 年 8 月から 2013 年 3 月まで、延べ 166 名の学生が学習支援活動等に参加しました。日常の学習支援活動の他、栄養バランスと適量を知ってもらう「お弁当箱法」の講習会、弦楽演奏と合唱による音楽会など、本学の学科の特色を生かした取り組みも行いました。

＊大原小学校学習支援　活動報告

食品栄養学科４年　伊藤真奈美

私たちは被災した子どもたちの「日常」の再生を目指し活動してきましたが、私はその中でも石巻市立大原小学校に重点的に通ってきました。振り返ると、最初は子どもたちの様子を伺いながら、探り探りになっていたと思います。子どもたちも敬語で話しかけてきたり、少し距離があるように感じていました。しかし、関わる回数が多くなる毎に、子どもたちは自分の家族のことや、家のこと、友達のことについて、聞いてほしいというように話しかけてくれるようになりました。

私は、震災によって家族を亡くした子どももいる特定の学年に力を入れて関わってきました。初めの頃は、その子どもが授業を少し面倒そうに聞いているな、休み時間も感情の起伏が激しいな、というようにしか思っていませんでしたが、関わっていくうちに、家族のことを話してくれるようになり、その事実が分かりました。徐々にその子どもは笑顔を見せてくれるようになり、今では「次はいつ来る

の？」と聞いてくれます。他の子どもたちも名前を覚えてくれていたり、「いつも来ている宮城学院のお姉さん」と言ってくれたりします。子どもたちが心を開いてくれ、私たちが本当の子どもの「日常」を支援するには、やはり長期的に関わっていく必要があるのだと実感します。

＊大原小学校　お弁当箱法活動報告

食品栄養学科４年　浅野結子・鈴木結希瑛

昨年の 8 月から継続的に学習支援を行ってきたことで、少しずつですが子どもたちが抱えている健康の課題が見えてきました。震災後、子どもたちの多くが仮設住宅からバスで通学することになったために、放課後に身体を動かして遊ぶ時間が取れず、運動不足となっています。それに加え、以前からの食の好き嫌いによる栄養の偏りも顕著になり、肥満傾向にあることが伺えました。このような現状を踏まえ、学習支援にとどまらず、私たちに出来ることは何かを考え、食品栄養学科の学生を中心に 12 月 14 日、『お弁当箱法』の授業をさせていただきました。『お弁当箱法』とは、私たちが大学の講義で学んだ食事の指導方法で、「自分に合ったお弁当箱を選ぶ」「主食 3：主菜 1：副菜 2 の表面積比」など 5 つのルールがあり、1 回の食事の量や栄養バランスについて学ぶものです。

10 月に『お弁当箱法プロジェクト』が発足し、準備を進めてきました。お弁当に入れるメニューを決める際には、子どもたちにアンケートを実施し、家庭でも簡単に作れることと、栄養バランスや彩り等を考慮した「ごはん」「豆腐ハンバーグ」「卵焼き」「ポテトサラダ」「きんぴらごぼう」「ほうれん草のお浸し」に決めました。

『お弁当箱法』当日は、子どもたちにわかりやすいようにイラストを多用したパワーポイントを使用し、資料として残るように子ども用と保護者用の二種類のリーフレットも作成し、配布しました。

お弁当に入れるメニューの調理は学生と 5,6 年生が行い、ポイントの説明の後は、一人ずつお弁当箱に詰める作業を行いました。子どもたちは、おかずを隙間なく詰める作業に苦労していましたが、学生のサポートによって完成した世界で一つだけのお弁当にとても喜んでいました。「お弁当箱って、こんなにいっぱい入るんだね！」、「主菜の量って、こんなに少ないんだね！いつも食べ過ぎていたよ。」との声も聞かれ、子どもたちの新たな発見や学びの瞬間に立ち会えたことに感動を覚えました。それと同時に、私たちの伝えたいことが子どもたちの学びたいものへと繋がったことで、やりがいを感じました。後日、学習支援に行った際に、配布したお弁当箱を活用してくれていたり、自分でお弁当を作っている子どもも見受けられ、私たちも授業の意義を実感することができました。

子どもたちには、今回の授業の目的である食事の量と栄養バランスについて身をもって感じてもらうことが出来たのではないかと思っています。しかしながら、余ったおかずをおかわりする子どももおり、適量を教えることの難しさを実感しました。これからも継続的に子どもたちの栄養面をサポートしていくことが必要であると考えると共に、今回は全体へ向けた授業を行いましたが、今後は個々に応じた支援へと繋げていくことが、より効果的であると感じました。

＊大原小学校音楽会　活動報告

音楽科３年　佐藤麻美

２月 21 日（木）、音楽科の先生と学生による弦楽四重奏と合唱の音楽会を行いました。食品栄養学科と児童教育学科の学生たちはお菓子を作り、体育館に集まってきた子どもたち一人ひとりにお菓子の入った袋を手渡しました。

この音楽会は、音楽の面でも何か出来ないかと企画したもので、今回、菊池恭江先生（本学音楽科教授）と学生による弦楽四重奏と音楽科 3 年生を中心とした有志 14 人による合唱を演奏しました。

弦楽四重奏は身近なクラシック音楽を 7 曲を演奏し、子どもたちは目の前で聞く本物の音に、お菓子を食べるのも忘れて聞き入っていました。曲と曲の合間には、菊池先生が次に演奏する曲の背景や作曲者についてわかりやすく解説し、最初は緊張気味だった子どもたちも、菊池先生のクイズに元気に答えたり、知っている曲には目を輝かせるなど、生のクラシック音楽に惹きこまれていました。

音楽科有志による合唱では、子どもたちは体を揺らしながら聞いてくれたり、目をキラキラさせながら食い入るように見つめてくれたりと、真剣に聞いてくれました。今回の音楽会を行うにあたっては、小学生に喜んでもらえる曲を皆で考えて練習を重ねてきました。ディズニーやトトロなど馴染みのある曲をメドレーにしたり、小学校の教科書に載っている曲を選び、フルートとクラリネットのソロも加え、より楽しんでもらえるように工夫しています。子どもたちは知っている曲を一緒に口ずさんでくれたり、手拍子してくれたりと、演奏するこちらも少しでも子どもたちの笑顔が見たい、楽しんでもらいたいという思いが増し、精一杯の気持ちを込めて演奏しました。

最後に、大原小学校の全校合唱曲で先生と子どもたち全員が歌って踊れる、嵐の「ワイルド・アット・ハート」を、会場にいるみんなで歌いました。小学校の先生が指揮と伴奏でみんなを盛り上げ、私たちも中に入れていただき、会場全体に一体感が生まれました。みんなと音楽を共有出来た気がしてとても嬉しく、楽しいひと時となりました。

帰り際、子どもたちは「またね」と大きな声で送ってくれ、小学生の明るく素直な声と笑顔に元気をもらって帰宅しました。小学生の皆さんに楽しかったと思ってもらえればとても嬉しいですし、また子どもたちの笑顔に会いたく、音楽を通して今後も継続的な支援を続けていきたいと思っています。

2．小学生のためのサマーカレッジ 2012

「小学生のためのサマーカレッジ」は、仙台市内を中心とした県内の被災した小学校の子どもたちを本学のキャンパスに招き、大学ならではの学びと遊びを体験してもらう総合型のイベントで、被災地児童のケアという観点に囚われず、被災以前の水準を超える高度な知的・感性的な冒険の機会を子どもたちに提供することを目指し、2011 年度から行っています。

この活動の特色は、子どもたちに本学ならではの専門性を活かした「学び」「遊び」「食」「音楽」を融合させた総合的なカリキュラムを通じて、子どもたちが心の底から楽しめる特別な 1 日を提供することにあります。その中で、子どもたちの創造性や可能性を伸ばしていくサポートを行い、子どもたちが子どもらしく過ごせる「日常」の回復に寄与することを目的としています。

2012 年度は 7 月 31 日と 8 月 1 日の 2 日間行われ、62 名の小学生が参加しました。学生は 2 日間で延べ 108 名がプロジェクトメンバーとして参加し、記録、遊び、講座など各担当に分かれて小学生の学びと遊びに寄り添いました。

「キャンパスの自然のなかで遊び、学び、表現する！」をテーマに、1 日目は本学キャンパス内の遊歩道をみんなで歩き、見たもの、感じたものを表現する臨床美術（クリニカルアート）の講座を、青木一則先生（東北福祉大学准教授、本学非常勤講師）の指導のもと、行いました。完成した子どもたちの作品は学内に掲示した他、HP でも紹介させていただきました。子どもたちの豊かな感性に、学生や先生たちから「全て合わせて 1 枚の絵のように美しい」との声もありました。

昼食は、食品栄養学科の学生たちが「森のレストラン」をテーマに学食を装飾し、メニューの開発、調理も担当しました。大人数の昼食を 2 日間とも準備するのは大変でしたが、子どもたちの「美味しい！」という言葉に、学生たちも感無量でした。

遊びの時間は、伝承遊びやスポーツの他、今年は池での筏遊びも加わり、行列ができる人気となっていました。

「小学生のためのサマーカレッジ」では、2 日目に行われる本学教授陣による全 8 講座の中から、子どもたちが自分で参加したい講座を自ら選択することが特色となっています。多岐に渡る内容、かつ午前と午後で1講座ずつの参加となるため、子どもたちは選択に悩み、「全部受けたい！」との声も挙がっていました。

本学礼拝堂で行われた終わりの会では、パイプオルガンの生演奏が流れる中、一人ずつ名前を呼び、修了証書を受け取りました。6 年生からは、「中学生のためのサマーカレッジもぜひ開いてほしい」との希望がありました。

2 日間、大人のためのプログラムも実施し、1 日目は井上研一郎先生（本学人間文化学科教授）による特別講座「女性を描く　女性が描く」が開講され、2 日目は学生記録班が撮影し編集した子どもたちの映像を見ていただき、子どもたちの体験を保護者の方々にも共有していただきました。

終了後、参加した保護者からは、「この夏一番の笑顔だった」「震災以来、なかなか広い場所で遊ぶことができなかったので、思い切り遊べて本当に楽しい顔をしていた」などの言葉をいただきました。

＊サマーカレッジ　活動報告

児童教育学科３年　引地リサ

震災で受けた被害は物理的なものだけでなく、人々の心にも大きな影響を及ぼし、子どもたちは学校で友達と遊ぶ空間、家族と過ごす空間、学ぶ空間、様々な場所を失いました。

宮城学院キャンパス内の豊かな自然に触れ、何にも遠慮することなく思うがまま遊んで、多くのことから解放されることを願い、私たちは沢山の遊びや企画を考えてきました。参加した子どもたちは、自然の中でさまざまな発見をし、何度も満面の笑みを浮かべてくれ、子どもたちの笑顔によって私たち自身が励まされ、前に進む力をもらいました。心から笑い、自然に触れ、友達の心に触れ、新しいことを学ぼうとする姿勢は、子ども自身が持っている前に進もうとする力を引き出してくれるのではないかと思います。

学ぶことと同じくらいに遊ぶことは大切です。なぜなら遊んでいる時の子どもの心は、豊かな感情に充ち溢れているからです。それは、私たち学生も同じでした。震災によって心に負った傷が子どもたちと関わる中で少しずつ癒されていくのを感じました。悩み、人の「脆さ」を感じていた私たちも、子どもたちの「日常」を回復しようとしたことで、私たち自身の「日常」も回復されていきました。

誰かの為にと思い活動するとき、私たちの中にある感情が動かされたり、その活動を行う事で新しい原動力を見つけたりすることは多くあります。そのことが失われていた私たちの「今」を見つめる力と前に進む力を取り戻してくれたと思います。この活動は、参加した子どもたち、私たち学生、両者にとって大きな意味がありました。

見えにくくなってきている子どもたちの心の中の悲しみにどう寄り添えばいいのか、自分ができることが限られているという悔しさを私は常に感じていました。そのような中で多くの人と出会い、関わる中で気づいたことがあります。それは、人は脆いものだからこそ、人との関係が必要であり、目に見えないつながりが大切である、ということです。サマーカレッジに参加した子どもたちと私たちは、この活動を通して繋がっていける。そして、その繋がりが私たち自身をこれからもずっと強く支えてくれるのだと思います。

私たちの大学では、サマーカレッジに参加してから、子どもの日常にもっと寄り添った支援を行いたいと感じ、積極的にボランティアに取り組む学生が多くなりました。活動を続け、被災地のことを知

れば知るほど、もっと長期的に息の長い支援が求められていると強く感じています。この活動は、子どもに寄り添い、成長や学びを 1 番に考え、学びを強要するのではなく、遊びを通して学ぶことが子どもにとって主体的に学ぶことであり、それこそが教育の理想である、と感じるきっかけにもなりました。学校教育の中では体験できないカリキュラムの中で、本当の教育とは何か、教師と子どもの関係も含め、自分自身の教育観を再構築する機会になり、子どもの成長を間近で感じることができて、今後の学びに繋がる貴重な時間ともなりました。サマーカレッジの活動は、私たち自分自身の成長につながる取り組みであると思います。

3．仙台市立南光台小学校

仙台市泉区にある仙台市立南光台小学校は、地震による地盤沈下や地滑りなどで校舎や体育館に大きな被害を受けました。震災直後は南光台コミュニティセンターや南光台児童館、南光台中学校、八乙女中学校など 4 カ所に分散して授業を行っていましたが、2011 年 11 月からは校庭に建てられたプレハブの仮設校舎で授業を再開しています。

本学では震災直後の 2011 年 4 月より学生たちが交代で南光台小学校に行き、継続的に学習支援を行っています。2012 年 8 月～ 2013 年 3 月までの 8 カ月間、延べ 78 名の学生が参加しました。

＊仙台市立南光台小学校　活動報告

食品栄養学科３年　相澤恵美

震災から 2 年が経ちましたが、目に見えない部分でまだ子どもたちに震災の傷が残っていることに気づいたことがあります。ある時、火災報知器が誤作動し、サイレン音が校内放送で流れたことがありました。その場で動けなくなった子どもや、手を握ってくる子ども、手の震えがなかなか止まらない子どももいました。日常的には元気にしている子どもたちも、地震の時の恐怖感がまだ薄らいではいないことを実感しました。

南光台小学校での学習支援は、得るものが多く刺激的です。授業はもちろん、休み時間、給食、掃除、学校行事等、子どもたちと接する様々な場面があり、日々いろいろなことが時間や場所を選ばずに起こります。常に教員に必要なことを学ぶことができると感じています。

学生として学校教育に参加できることは私にとって大きな喜びであり、期待も大きかったのですが、同時に不安なことも多々ありました。特に活動を始めたばかりの頃は、まず自分の居場所、存在意義を見出すことが難しく、「今日はどのクラスに行けばいいのだろう」「どのタイミングで先生に聞こう」といった職員室でのことから、「子どもにこんなことを言われてしまったらどうしよう」「先生がいない時に子どもが騒ぎだしたらどうしよう」といった子どもの指導に関することまで様々でした。そのような日々の悩みを受け止めてくれたのが、学校にいる先生方であり、子どもたちでした。朝、職員室に入ると、「おはようございます！今日もよろしくお願いします」と温かく声をかけてくれる先生、「今日は1年1組をお願いします！」と活動を提供してくれる先生、「先生、今日はありがどうございました、助かりました」と私の活動を認めてくれる先生が周りにいつもいてくれました。そして学級や廊下では、温かく優しい子どもたちが私の接し方、指導の仕方に対して素直に反応を示してくれました。

活動を認めてくれる先生たちがいつも周りにいることで、「活動を見守ってくれる存在」「活動を認め、評価してくれる存在」が子どもの成長に必要なように、

自分の成長にとっても大切だということに改めて気づくことができました。

大学の授業もあるため、定期的に子どもたちと接することが難しいことが課題となっています。ただ、時間が限られているからこそ、全力で子どもたちに向き合ってきました。これからも時間のとれる限り、通い続けたいと思っています。

4．東松島小・中学校　夏休み学習支援

2012 年 7 月～ 8 月にかけ、東松島市立赤井南小学校、宮戸小学校、小野小学校、鳴瀬第一中学校の夏休み学習支援に、延べ 37 名の学生が参加しました。

津波被害が激しかった東松島市ではＪＲの不通区間があり、仙台市内から通うためには代替バスや自家用車を利用しなければなりませんでした。支援の届きにくい場所だからこそ、地元にある大学として行く価値があると実感した活動でもありました。

＊東松島市立宮戸小学校　活動報告

日本文学科２年　渡邉麻梨香

東松島市立宮戸小学校での学習支援に参加しました。宮戸小学校に比較的近い JR 野蒜駅は津波により不通区間になっており松島から代替バスで通うことになりましたが、野蒜駅から小学校まで徒歩 30 分以上かかるため、先生方が車で駅まで迎えに来て下さることもありました。小学校までの道すがら、被災地の現状や被災当時の様子などを詳しく話していただき、地震による津波の被害がいかに甚大だったのかについて生の声を聞く事ができました。震災によって受けた被害は建物だけではなく、人の心にも大きな傷跡を残していったことを実感しました。

このような震災が起こった後、私たちは子どもたちに対してどのようなことができるのか、子どもたちのために何かをしたいという気持ちで活動していましたが、お別れの際にお礼の言葉をいただき、ボランティアに伺った私の方が元気を分けてもらえた気がしました。私たちを温かく迎えてくださった宮戸小学校の子どもたち、そして活動中にも明るくアドバイスをしてくださった先生方に心より感謝しています。

＊東松島市立鳴瀬第一中学校　活動報告

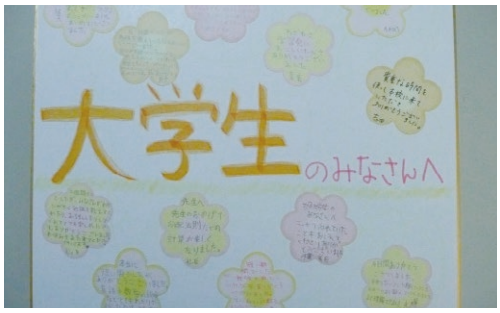
食品栄養学科４年　飯塚仁美

今回、東松島市を訪れ、震災後に一変した光景に言葉がありませんでした。担当した 3 年生たちは一見、平然としているように見えても、震災で見た故郷の様子を今でも心に深い傷として記憶していることと思います。

活動を通して一番感じた事は、学校全体の温かな雰囲気と先生と生徒の距離の近さでした。校長先生はじめ先生方は、生徒一人ひとりをよく見ていて、「先生たちがついている」という強い安心感がありました。こうした大人たちの存在は、震災を経験した子どもたちにとってどんなに頼りになることでしょう。

活動の最終日には、生徒の皆さんから寄せ書まで頂き、私たちの乗った車が見えなくなるまで手を振ってくれました。初めて生徒たちと対面した時は私たちも生徒たちも緊張し、「知らないお姉さんたちが来た」と警戒しているような様子でしたが、隣に座って勉強を教えたり、時には雑談をしたり、生徒たちと近い目線で過ごしたことで、確かに距離を縮める事が出来たのだと思います。

教員を目指す私にとって今回の活動は、理想の学校像、教師像を具体的なものにしました。鳴瀬第一中学校の先生方の温かさは、積極的に人と関わるところからくるものだと思いました。私自身も積極的に人と関わり、先生とも生徒とも信頼関係の築ける先生になりたいと思います。



5．りんごプロジェクト

「りんごはどっちがあたま？」「りんごの香りは紫色」「りんごの葉っぱはりんごの心臓」、亘理・荒浜の保育所の 5 歳児たちが、このような感性豊かで素敵な言葉をくれました。

りんごプロジェクトは被災した地域を再発見することと、プロジェクト型の保育を実現することを目的に、保育所の保育士、本学学生・院生・教員が立ち上げました。亘理の特産であるりんごをテーマに、「見る」「触る」「食べる」「香りを嗅ぐ」など、五感でりんごにふれ、りんごを味わいながら「はてな？」を探しました。実際に地元のりんご園へ赴き自ら収穫した自分のりんごを観察し、臨床美術の手法で、それぞれが自分だけのりんごを描きました。その、一つ一つのりんごを集めて私たちみんなのりんごの木（コラージュ）を創りました。

子どもたちが、全身でりんごを感じて、表現する。その過程で生まれたのが、冒頭の子どもたちの言葉です。

1 月 30 日に行った有田和正先生（教材・授業開発研究所代表、東北福祉大学子ども科学部特任教授、2011 年度サマーカレッジ講師）のワークショップでは、りんごプロジェクトの院生が活動報告を行い、有田先生より講評をいただきました。有田先生より、「実際に木になっている様子を確認できるのは良い」とのお言葉を頂いたり、「一つのりんごが出来るのに、葉っぱは何枚必要か？」と逆に「はてな？」のたねを頂いたり、子どもたちの興味を引き付ける手法についてもアドバイスを頂きました。

今年度は萌芽的 / 試行的なプロジェクトとして実施し、確かな感触が得られたので、2013 年度は保育士の方々との協働のもと、プロジェクトを継承、発展させたいと考えています。

＊りんごプロジェクト　活動報告

大学院 健康栄養学研究科 1 年
山本博恵・高橋比呂映

亘理町は、東日本大震災で甚大な津波被害のあった地域で、今でも仮設住居で暮らしている人たちが多くいます。亘理町の中でも、沿岸の荒浜や吉田地区の保育所では、仮設施設で保育を行っています。また、亘理町の農家の方も津波で大きな被害を受け、津波の被害から逃れた場所でも、原発の風評被害などで大きな損害が出た農家の方も多いと伺っています。本プロジェクトはこうした背景から、被災した亘理町の復興をサポートするという側面も併せ持ち、本学の院生の発案により、他学科にも参加者を募り、始まりました。

りんごプロジェクトは、イタリアのレッジョ・エミリアのプロジェクト型保育を創造的なヒントとして、「感じる」「学ぶ」「表現する」、この 3 つをプロジェクトの三本柱にし、子どもの興味関心に寄り添えるようなカリキュラムをデザインしました。

レッジョ・エミリアとは、北イタリアにあるレッジョ・エミリア市の公立幼児学校と乳幼児センターで行っている保育で、標語の「子どもたちの 100 の言葉」には、子どもは 100 の表現形式を持っているという意味が込められています。レッジョ・エミリアで行われているプロジェクト型保育は、一つのテーマについて、子どもたちそれぞれの関心や好奇心を掘り下げて発展させていきます。私たち院生も、レッジョ・エミリアのビデオを保育所の先生方と一緒に見て、理解を深めていきました。

今回、亘理保育所・荒浜保育所に通う 5 歳児クラスの子どもたちとプロジェクトを全 6 回に分けて進めて

いきました。

このプロジェクトは、実際にりんごを見て・触れて・感じて、りんごの“はてな”探しをキーワードにりんごへの関心を深めていきました。子どもたちから出た“はてな”は、りんごの形をしたカードに書き、事前に作成していた木に貼りつけ、皆で“はてな”の木を作りました。リンゴ園へ行き、“はてな”を解決したり、“はてな”を探したりしました。また、保育所へ帰ってきた後は採ってきたりんごを見て・切って・食べて、さらに学びを深めたり、自分で採ってきたりんごを臨床美術の手法に沿って、“私だけの”りんごを描きました。最後は、1人1人の絵を講評し、それを大きな紙に貼りつけ、1枚の“みんなの”りんごの絵を完成させました。

今回のプロジェクトを終えて、学んだことは、大きく分けて2つあります。

1つ目は、子どもは誰しもが豊かな創造性・大きな可能性を持っており、その可能性は、環境や引き出し方によって変わってくるということです。

1回目のりんごの絵は多くの子どもがステレオタイプなものを描いていました。しかし、食べたり、自分で切ったり、目をつぶって匂いを感じたり、触ったり、自分のりんごで学びを深めた子どもたちは、2回目のりんごの絵ではステレオタイプなりんごの絵を描く子どもはいませんでした。また、「りんごの種が涙の形」という発言や「蜜がハートになっているよ」という発言を聞いて、どの子どももレッジョ・エミリア市の子どもたちと同じくらい豊かな感性、想像力を持っているのだと感じました。

今回は私たちがつくったカリキュラムに沿ってプロジェクトを実行しました。レッジョ・エミリアでは、子どもたちの発言を基に保育士、教育学者、アトリエリスタと呼ばれる美術教師がミーティングを開き、次のカリキュラムをデザインしています。私たちも来年度のプロジェクトでは、子どもたちの発言の記録を基に、次のカリキュラムを柔軟にデザインしていくことが課題だと感じています。

2つ目は、地元の特産品を使ったプロジェクトは、普段何気なく暮らしている地域を見直すきっかけにもなるということです。今回、亘理町の特産品であるりんごをプロジェクトのコアとして進めてきました。亘理町の方々にとっては、正にこのりんごが町を代表するものです。子どもたちにふるさとに対する郷土愛を育んでもらえたら、という願いも込められていました。また、このプロジェクトは二つの保育所合同で行ってきましたが、みんなでこのプロジェクトを進めて、みんなで一枚のりんごの絵を完成させたことは、何の隔たりもなく学び合うことにもつながったのではないかと思います。この郷土愛と協同的な学びは、震災復興へつながる強い土台となる可能性を感じました。

今回のプロジェクトの経験・学んだことは、保育所の先生方とも互いに共有しあい、分析検討し、次回のプロジェクトに反映し、よりよいプロジェクトへしていきたいと思います。

6．その他の活動

◆大崎農家見学会

6 月 16 日（土）、県北部地方振興事務所が主催する「おおさき食材の利活用促進に向けた現地調査・見学会」が行われました。災害復興支援活動で行う食育支援のための事前準備とワークショップとして、食に関する自主活動プロジェクトなど 6 団体から計 22 名が参加しました。

見学先となったデリシャストマトを生産している「デリシャスファーム」、農家レストラン「野の風」、大崎の生産物を販売している「花野果市場」、ハートフルランド・ジャージー牧場とは、その後もさまざまな活動で連携しています。

◆石巻市立中津山第一小学校　親子料理教室

石巻市立中津山第一小学校で 7 月 25 日、食のほっとタイムの学生と同小学校の養護教諭（本学家政学科 OG）が共に企画した夏休み親子料理教室を開催しました。小学生 20 名と保護者 19 名、教員 3 名が参加し、栄養バランスと自分に合った適量を学ぶお弁当箱法について学んでいただきました。

参加した学生も、食に関する専門知識を持った管理栄養士と保護者等が連携を図りながら、地域全体で子どもたちがよりよい食生活を実践することができるように取り組んでいくことの重要性を実感した 1 日でした。

◆多賀城チャリティーコンサート

音楽科 OG 有志主催のチャリティーコンサートが 11 月 18 日に多賀城市で開催され、本学より音楽科学生有志 14 名が参加しました。なかにしあかね先生（本学音楽科教授）作曲の「立ち止まって」「今日もひとつ」の合唱は、多賀城市民の方々や多賀城の小学生・高校生、音楽科 OG と音楽科学生有志の総勢 80 名で構成され、なかにしあかね先生ご自身の指揮により披露されました。

多賀城市の地元の方々や子どもたちと一緒に一つのものを作り上げることで、想いを共有し、被災した方々へ音楽の力を届ける貴重な機会となり、その反響を実感できる活動となりました。

音楽を創り上げていく中、この合唱を誰に届けたいかを考える機会があり、小学生からは「自分の思いを家族へ届けたい。大事な友達にも伝えたい」、高校生からは「仲間と一緒に歌えることが幸せ。この思いを、会場にいる人と共有したい」などの意見が出ました。家族がそばにいてくれること、仲間がいること、皆で歌えること。歌い手一人

ひとりの思いが込められた合唱は、会場いっぱいに響き渡り、涙ぐむ観客の姿もありました。

◆気仙沼復興商店街南町紫市場１周年イベント

食品栄養学科の学生 6 名が 12 月 24 日、気仙沼復興商店街南町紫市場で行われたオープン 1 周年イベントに参加し、子どもたちのためのイベントスペース cadocco で子ども支援活動を行いました。cadocco は、震災で遊び場所をなくした子どもたちの集う場所として設けられたスペースです。

今回のイベントへの参加は、大学祭で出店したつみれ汁の調理でお世話になった、気仙沼に本店のあるあさひ鮨さんに、今度は自分たちが気仙沼の子どもたちを支援したいと申し出、南町紫市場をご紹介いただいたことにより実現しました。

クリスマス時期ということもあり、アメリカンフラワーをクリスマス風にアレンジしたオーナメント作りを行い、子どもたちと一緒に作成しました。子どもたちはカードに感謝の言葉を書き、「お母さんにあげるんだ！」など、私たちに嬉しそうに報告してくれました。

参加者からは、「クリスマスツリーは津波で流され、仮設住宅に住んでいるので飾る場所もないけれど、このオーナメントをツリーの代わりに家に飾ります」との感想も多く、子どもから大人の方までオーナメント作りを楽しんでいただくことができました。

◆被災地支援ブラスバンドプロジェクト

仙台市宮城野区にある仮設住宅の子どもたちを対象とした音楽支援（Heart Music School）を 11 月以来、宮城復興支援センターとの連携で行ってきました。

活動開始前の 10 月 31 日、本学ウィンドオーケストラサークルの学生たちが仮設住宅の集会所で演奏会を行い、子どもたちをはじめたくさんの住民の方にも聞いていただきました。

ウィンドオーケストラサークルの学生の他、このプロジェクトに参加する学生たちは、事前に足立智昭先生（本学発達臨床学科教授）による被災地の子どもたちと家族の現状に関する講座を受け、被災した子どもたちが今、どのような状況にあるのかなどについて学んでから、活動を開始しました。

週に 1 度、学生たちが仮設住宅を訪問し、始めてから数カ月で音階が吹けるまでに成長した子どももいます。今後は、子どもたちがそれぞれの楽器で合奏し、簡単な曲が演奏できるくらいになることを目標にしていきたいと考えています。

本報告書は、住友商事　東日本再生ユースチャレンジ・プログラム 2012－活動・研究助成－の助成により、作成しました。

宮城学院女子大学
リエゾン・アクション・センター

〒981-8557 宮城県仙台市青葉区桜ケ丘9-1-1
TEL：022-279-1340（直通） FAX：022-279-4555